イスラーム世界研究　第7巻（2014年3月）143–151頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 7 (March 2014), pp.143–151

京都大学アキール文庫について

山根　聡*

Aqeel Collection of Kyoto University

YAMANE So

The project of Islamic Area Studies, Kyoto University has been promoting the preservation of the intellectual heritage of Islamic culture and the compilation of a database of this heritage. In this regard, Kyoto University decided to house the huge collection of books on Islamic culture in South Asia collected by Dr. Mu‘inuddin Aqeel in 2012, which contains almost 27,000 items, including both rare books and magazines. This paper overviews the characteristics of the Aqeel Collection with a introduction to Dr. Aqeel who has had a deep attachment to the Japanese academic community.

There are many private libraries in South Asia but most of them specialize in a particular subject such as Islamic studies, Urdu literature, art, and so on. The most distinguished characteristic of the Aqeel Collection is that since Dr. Aqeel has wide-ranging interests concerning Islamic culture in South Asia, his collection includes many books on different subjects such as tazkiras, books on religions, history, or literature. Because he tried to collect as many books on one particular subject as he could, his collection includes rare tazkiras of many Sufis of different cities of the Indo-Subcontinent and the regional history of many cities, even small towns of the sub-continent. Besides, Dr. Aqeel adopted his own method of classification for the books. For example, for books on history, Dr. Aqeel classified books according to regions and historical events, such as Pre-Mughal period, Mughal period, Sikh era, British era, Independent movement, and after the independence of India and Pakistan. He even put some literary magazines on a particular subject on the same shelf as the books on the same subject. This method of classification has provided scholars with easy to access all the literature on a particular subject. Thus, the study of these books must inevitably provide multidimensional perspectives about Islam in South Asia.

イスラーム地域研究京都拠点では、イスラーム学に関する知的遺産のデータベース化を主要な研究計画の一つとして進めてきた。また、イスラーム世界において最大のムスリム人口を抱えるばかりでなく、他のイスラーム世界に政治・経済的に多くの影響を与えた南アジアのイスラームの動態を解明するべく、NIHUプログラム地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」のプロジェクトの中心的拠点としても、研究成果を発表してきている[1)]。

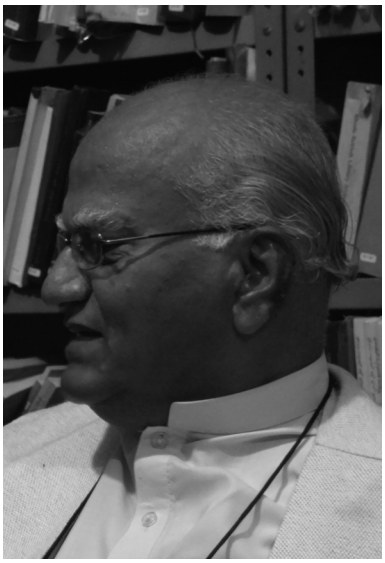
これらの研究を深化させるためには基礎資料となる書籍等各種文献の充実が欠かせないことは言うを俟たないが、わが国においては、南アジアのイスラーム文献の主流となるウルドゥー語の書籍に関しては、大阪大学（旧大阪外国語大学）、東京外国語大学の図書館が約1世紀にわたって収集に努めてきたものの、さらなる資料収集の必要性が高まっていた。2012年度、京都大学に2万

*　大阪大学大学院言語文化研究科　教授

1）たとえば、加賀谷寛著　山根聡・松村耕光・仁子寿晴編『南アジアとイスラーム』、山根聡監修　篠置理子編著『マウドゥーディー著作目録と解題』などが挙げられる。後者については英語版を刊行する予定である。英語版はマウドゥーディー研究のみならず、現代南アジア・イスラーム論や現代イスラーム復興思想研究に関する基礎資料として世界的にも意義あるものと確信する。

6000点を超える[2]南アジアのイスラームに関する書籍が収蔵されることとなったことは、南アジアのイスラームに関する研究を発展させるうえでより大きな意義を持つこととなった。本報告は、これらをさらに深化、推進させるための科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」（代表・東長靖）の成果として発表するものである。

京都大学が受け入れた書籍コレクションは、パキスタンのカラーチー大学ウルドゥー文学研究科長や国際イスラーム大学（イスラーマーバード）ウルドゥー文学研究科長等を歴任されたムイーヌッディーン・アキール博士（Dr. Saiyid Mu‘īn al-Dīn Aqīl）の膨大な個人蔵書を引き受けることによって実現した。そこでこれらの書籍を、博士のお名前を冠して通称「アキール文庫 Aqeel Collection」と名付けることとなった。


ムイーヌッディーン・アキール博士

アキール博士は1946年、英領インドのハイダラーバード藩王国内の町オードギール（Audogir）に生まれ、パキスタン独立後の1953年3月にご家族（ご両親（サイイド・ザミールッディーン Saiyid Ẓamīruddīn、アズィーザ・バーノー ‘Azīza Bāno ご夫妻）および4歳上の兄上サイイド・ムヒーウッデゥーン・ニサール氏 Saiyid Muḥīuddin Nithār）とともにカラーチーへ移住された[3]。カラーチー大学をご卒業後、1969年に文学修士（ウルドゥー文学、カラーチー大学）、1975年に博士号（ウルドゥー文学、カラーチー大学）を取得された。母校カラーチー大学に講師として就職されたのは1970年のことであった。博士号学位請求論文のタイトルは「独立運動におけるウルドゥー語の役割 *Taḥrīk-e Āzādī men Urdū kā Ḥiṣṣa*」である。博士は2003年には19世紀に書かれた女性による現存する最古のウルドゥー語日記の校訂（『過ぎ去りし物語 *Bītī Kahānī*』）により、D.Lit.もカラーチー大学から受けられている。ご家族は奥様のファリーサ・アキール（Farīsa ‘Aqīl）さん、一人娘のラミーサ・アキール（Ramīsa Navīn ‘Aqīl, 1988–）さんがいらっしゃる。

アキール博士はカラーチー大学を中心に研究者育成に努めてこられたが、外国人を対象としたウルドゥー語教育との関わりも深く、1969年から72年までは在カラーチー米国領事館でウルドゥー語教育に携わられたほか、同時期には日本の外務省専門職に対する現地でのウルドゥー語教育も担当された。2008年より約3年間カラーチー総領事を務めた中野勝一（現・大東文化大学非常勤講師）はアキール博士の最初の教え子である。さらに、1986年から87年までナポリ大学（イタリア）東洋学部でウルドゥー語教育を担当されたが、外国人に対するウルドゥー語教育で最も長かったのは1993年から2000年までの東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科での客員教授時代である。東京外国語大学からカラーチー大学に戻られると、ウルドゥー文学研究科長等を歴任されつつ、多くの日本人留学生を受け入れてこられるばかりでなく、日本人研究者に文献収集に関する情報提供等を続けてこられた。2008年にカラーチー大学を定年退職後、首都イスラーマーバードにある国際イスラーム大学ウルドゥー文学研究科長に就任され、2010年まで教鞭を執られた。

アキール博士と日本人との交流はウルドゥー語教育や文献調査に関することから始まったが、そ

2）書籍・雑誌のみならず、新聞、パンフレットを含む点数。

3）Aqīl, Mu‘īnddīn, *Merā Kutb Khāna…Nau‘iyat, Infirādiyat,…aur Mustaqbil!*, Karachi: BTA Publishing House, 2012.

の後は研究交流面で大いにご助力いただくこととなった。2007 年から 2008 年にかけての 6 か月間、大阪大学世界言語研究センターで研究員としてウルドゥー語教材開発に携わられつつ、ウルドゥー文学研究や南アジア・イスラーム研究に関する各種研究会でのご報告をいただいた。その後、2008 年の 3 か月間を京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で客員研究員として研究活動に携わられ、ここでも研究会やセミナーでの発表等をされてきた。こうした研究交流は、2010 年 2 月に京都で開催された国際イスラーム会議（京都国際会館）でのセッションでのご発表に結実したといえよう。こうして、アキール博士と日本人研究者や学生との交流は年月を重ねるとともに深まり、ウルドゥー語研究者から南アジア研究者、イスラーム研究者へと研究者のネットワークも広がっていったのである。

研究交流の場においてアキール博士が活躍されたのは、ほかならぬアキール氏の膨大な研究業績と該博な知識があってこそありえたものである。研究に関わる著書は校訂本や編著を含めると 60 冊にもおよび、学術論文数は英語論文 15 本、ウルドゥー語の論文は 300 本に達するほどの多くの業績を残しておられる。ご講演を含む口頭での研究発表の数は数えきれないものとなる。パキスタン高等教育局において研究や教授科目の選定委員、パキスタンの主要 6 大学の学術顧問等を歴任され、現在も多忙な日々を過ごしておられる。アキール博士の主だった業績の一端を著作のみで紹介すると、以下が挙げられよう[4)]。

Dakkan aur Īrān: Salṯanat-e Bahmanīya aur Īrān ke ʻIlmī o Tamaddunī Rawābit (Daccan and Iran: Cultural and Academic Relations between Daccan and Iran), Karachi, 1983

Khān, Shāhid Ḥusain (ed.) *Taḥrīk-e Hijrat 1920 men Muslmānān-e Barr-e Azīm Pāk o Hind kī Hijrat-e Afghānistān Tārīkh, Afkār aur Dastāvezāt*, Karachi: Idāra-e Taḥqīqāt-e Afkār o Taḥrīkāt-e Millī[5)], 1985.

Taḥrīk-e Āzādī aur Mumalikat-e Ḥaidarābād (Freedom Movement and the Hyderabad State), Karachi, 1990.

Taḥrīk-e Pākistān kā Taʻlīmī Pas Manẓar (Edicational Background of Pakistan Movement), Lahore.

Dakkan kā ʻAhd-e Islāmī, 1300–1950: Ek Bunyādī Kitābiyāt (Islamic Era of Daccan, 1300–1950: A Basic Bibliography), edited jointly with Dr. Omar Khālidī, Karachi, 1993.

"Language and Nationalism: Hindi a Cause in the Emergence of Separatism in the British India." In: *Area and Culture Studies*. No. 49, 1993.

"A Culture Shock: A Narrative of Late 19th Century Japan in Urdu". In: *Area and Culture studies*. No: 53, 1996.

Navādirāt-e Adab (Rare Material of Literature), Karachi, 1997.

Kalāmat-e Ābdār: Majmūʻa-e Ruq'at-e Wāṣifī (Letters of Maulvi Muhammad Mehdi Wasif of Madras), (Persian), edited with Introduction and Annotations, Karachi, 1999.

Taḥrīk-e Āzādī meṇ Urdū kā Ḥiṣṣa (The Role of Urdu language in Freedom Movement), 2nd edition, Lahore, 2008 (1st.1976).

Bītī Kahānī: Urdū kī Avvalīn Niswānī Khudnavisht aur Tārīkh-e-Patodī kā Buniyādī Mākhadh (the days that passed: First Famine Memoirs in Urdu.) Written by: Shahr Bānō Begam, Princess of Patodi (British Indian State), ed. with annotation, 2nd enlarged edition, Lahore, 2008.

Rasmiyāt-e-Maqāla Nigārī, Urdū meṇ Maqāla Nigārī ke Jadīd-tar aur Scientific Uṣūl (Recent and Scientific

4) Rameesa Naveen Aqeel, *My Father Prof. Dr. Moinuddin Aqeel-A Brief Account of his Affiliation with Japan*, Karachi: BCC&T Press, University of Karachi, 2013.

5) 本書は 1920 年に英領インドで実施されたインド・ムスリムによるアフガニスタンへの聖遷に関する研究書で、書中のほとんどの部分の著者はアキール博士であるが、編者が自らの名前を冠して刊行したものである。

Methods for Research Articles and Thesis Writing in Urdu.), Karachi, 2009.

"Source Material in Modern South Asian Languages: Arabic, Persian and Urdu Sources in Europeans Libraries." In: *Me'yar*, I, Department of Urdu, International Islamic University. Islamabad, 2009.

Mashriq-e Tābān: Jāpān meṇ Islām Pākistān aur Urdū Zabān o Adab kā Muṯāl'a (Shining East: Studies on Islam, Pakistan and Urdu Language and Literature in Japan.), Purab Academy, Islamabad, 2010.

"The Muslims The Shari'a, and The Land: Problems, Concepts and Conflicts in South Asia" In: *IAS 3rd International Conference New Horizons in Islamic Area Studies: Continuity, Contestations and the Future. Papers / Handouts*, December 17–19, 2010, Kyoto International Conference Centre, Kyoto, Japan, 2010.

"Japan and Haiderabad: Sir Syed Ross Masood's Visit to Japan and its Impact on the Educational System of Haiderabad State in British India" In: *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*. 3-2, 2010.

"Commencement of Printing in the Muslim World: A View of Impact on Ulama at early Phase of Islamic Moderate Trends," in Y. Takashina in Collaboration with H. Huziie, S. Yamane, J. Komori, S. Takeda and D. Furuya (eds.) *Toward Hetero-Symbiosis and Tolerance: Lingua-Cultural Studies in Ethnic Conflicts of the World*, Lahore, Sang-e Meel Publication, 2012.

これら輝かしい業績には、論文のみならず、貴重な書籍の校訂や、後進育成のための論文執筆方法に関する指南書、国際会議での報告書など様々な内容のものが含まれている。こうした研究業績を支えているのは、アキール博士が幼いころから収集してこられた膨大な書籍など文献資料である。研究者のネットワークを通じて、同世代の研究者で書籍収集家としても知られたムシュフィク・ハージャ（Mushfiq Khvāja, 1935–2005）元ウルドゥー促進協会理事や元大英図書館研究員サリームッディーン・クレイシー（Salīmuddīn Qureshī）氏、南アジアに所蔵されるペルシア語文献調査において世界的に知られるアーリフ・ナウシャーヒー（'Ārif Naushāhī, 1955–）ゴードン大学教授（パキスタン・ラーワルピンディー）、ウルドゥー文学研究のタフスィーン・フィラーキー（Tahsin Firaqi, 1950?–）元パンジャーブ大学ウルドゥー文学研究科長など学友との情報交換が、アキール博士の知識をさらに広げたのであった。

パキスタンで文献収集を続けておられたアキール博士にとって、1990年代の東京での生活は多くの点で研究生活に利することとなった。まずは日本各地の研究機関に所蔵されているウルドゥー語やペルシア語の貴重図書をご覧になることができた点である。東京外国語大学の蒲生礼一名誉教授や鈴木斌名誉教授、ヒンディー語学科の藤井毅教授が収集された書籍や、大阪外国語大学の澤文庫等の書籍、京都大学や東京大学、東洋文庫の図書の所蔵状況について常に関心を持っておられた。さらに、研究プロジェクトの一環として大英図書館等で文献調査を行ったことなども、アキール文庫の充実に大きく貢献したのである。

かくして、2013年の時点で集められたウルドゥー語を中心とする文献資料は27,000点に上るものとなった。これは南アジア研究において屈指のコレクションとして評価され、南アジアはもとより、ウルドゥー文学研究者や南アジア研究者の間でアキール博士の文庫はよく知られるようになっていた。

半世紀以上もの時間をかけて個人で収集されたこれらの書籍は言うまでもなくアキール博士そのものと言っても過言ではない。そのコレクションが、2013年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に所蔵されることとなったのには、ほかならぬアキール博士が大の親日派であられ

ることや、日本人研究者および図書館員に対する信頼の高さに裏打ちされている。パキスタンではしばしば、収集家の没後などさまざまな事情によってその個人コレクションが散逸する事態を招いている。また仮にどこかの機関に所蔵されたとしても、整理が遅々として進まず、保存状況も決して好ましからざるものとなっている場合が少なくない。アキール博士が正に生涯をかけて収集された貴重な図書について京都大学での所蔵を強く希望されたのは、同大学での図書の保存方法やその整理方法の水準の高さに強く感化されたためであった。

アキール文庫については、京都大学が中心となって調査チームを結成し、2011 年と 2012 年の夏約 2 週間ずつ現地調査を行った。蒸し暑い夏の間、1 時間ごとに起こる計画停電の中で、東長靖京都大学教授、今松泰同大学客員准教授、須永恵美子京都大学大学院一貫制博士課程（当時）、篠置理子大阪大学大学院前期課程（当時）、久保徳幸同大学前期課程（当時）、東加奈子同大学前期課程、山根聡が初年度は所蔵冊数の確認と分野の調査を行い、次年度は具体的な内容に関する調査を、アキール博士に逐次質問しながら実施した。帰国後、京都大学では本調査報告会が書籍のテーマごとに行われ、アキール文庫の重要性が再確認された。

さてここで、アキール文庫の特色について概観してみたい。昨年まで、アキール文庫はカラーチー市内北中部にあたる North Karachi 地区内にあるアキール氏私邸の 1 階部分に所蔵されてきた。1 階部分の部屋は 6 部屋あり、うち 1 部屋は応接室となっていて、残り 5 部屋が台所を含め書庫となっている[6)]。書庫となっている部屋は 12 畳ほどの部屋が 3 つ、20 畳ほどの部屋が 1 つ、12 畳ほどの台所で構成されており、玄関を入ってすぐ右手の 12 畳ほどの部屋が執務室を兼ねている。

執務室兼書庫 A

それぞれの部屋の書庫は、書籍のテーマ等によって分けられているが、その分類方法はアキール氏独特のものである。すなわち、執務室となっている部屋に所蔵されている歴史関連の図書の場合は、時代史のコーナーがムガル以前、ムガル期、スィク期、英領期、1857 年インド大反乱期、独立運動期、ナショナリズム関連、パキスタン構想、印パ分離独立後などに分けられているが、他にも地方史のコーナーがある。ムガル期のデリーについての文献を探そうと思う場合は、ムガル期の書棚とともに、デリーの歴史に関する書棚を探すこととなる。ただし、これが同じ部屋に保存されているので、大きな支障はなかった。ムガル以前の文献については、やはりアキール博士の関心がイスラーム史、思想史であるために、古代よりもむしろイスラーム期以降の出版物が集中している。時代としては 12 世紀から 16 世紀のムガル朝成立までに分けられている。英領期や独立運動期の部分は、アキール博士の関心の高さが窺える充実したもので、特にインド大反乱 100 年記念（1957 年）時に刊行されたパンフレットや小冊子類など、現在では入手不能な文献も揃っている。また独立運動関連文献は、運動主導者がウラマーであるか、政治家であるかなどによって分類され、パキスタン建国の父とされるムハンマド・アリー・ジンナー関連の書籍やインド国民会議派に関する書籍は別途分類されている。印パ独立運動に貢献した政治指導者については、ヒンドゥー、ムスリムを問わず収集されている。またこの書棚には、ジンナー生誕 100 周年を記念した新聞や雑誌なども置かれている。

6) 台所は調理用ではなく、お茶を淹れる程度に用いられるためのもので、流し台のある一面をのぞいた三面が書棚となっていた。ただし 1 面は応接室に面した窓があるため、書棚は窓の上の部分のみに設置されていた。

地方史については、デリー、ラクナウー、デカン、ムンバイ、マイソール、パンジャーブ、スィンド、ベンガル、ビハール、北西辺境州（現パフトゥンフア州）などの地域によって分類されている。南アジアの地方史については、インドやパキスタンの図書館や個人蔵書を見ても、図書館のある地域の地方史を中心として所蔵されており、むしろ日本など南アジア以外の図書館の方が全地域についての書籍を収集している場合が多いが、アキール文庫もまた、南アジアの各地域の歴史書や地誌を1960年代から集めている点で特徴的である。特にウルドゥー語による出版物は現在入手不能なものがあり、こうした書籍で構成されている地方史の充実したコレクションは他に類を見ないであろう。特に、アキール博士の生誕地であるデカンに関する文献は、小冊子の体裁の文献まで良好な状態で保存されており、現在入手不能な希少文献が存在する。パンジャーブ関連の書棚に、ラーホールはもとより、北西部の小都市ハサン・アブダール（Ḥasan Abdāl）から南部の都市バハーワルプール（Bahāwalpūr）など地方都市の地誌がおさめられているように、スィンド州のムスリムにとっての聖地ウッチ（Ucc）や小都市ハイルプール（Khayrpūr）など、各地域の都市に関する書籍も網羅的に所蔵されている。こうした地方都市の歴史に関する文献は、その都市の小さな出版社から刊行されたものが多く、発行部数も限られているために、刊行後数年もたつと入手困難となる場合が少なくない。こうした地誌が南アジア各地のものを含んでいる点もまた、アキール文庫の特筆すべき点であろう。

このほか、この部屋にはウルドゥー語で書かれた旅行記、外国人による南アジア旅行記、回想録、自伝、中東地誌、イスラーム世界論、インド・ムスリム論、南アジアのムスリム論などの書籍や、政治運動を主導したスーフィーに関する著作、18世紀南アジアにおいて主体的なムスリム社会の改革を唱えたシャー・ワリーウッラー（Shāh Walīullāh, 1703–62）に関する書籍、ジャマールッディーン・アフガーニー（Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1838/9–97）関連文献、印パ独立時にインドに残り、ヒンドゥーとムスリムの共存を主張した政治家であり学者であったアブル・カラーム・アーザード（Abū al-Kalām Āzād, 1888–1958）の関連図書、アブル・アアラー・マウドゥーディー（Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, 1903–79）関連文献、イスラーム復興運動に関する文献、南アジアのイスラーム復興関連文献、特にデーオバンド学派の思想及び指導的ウラマーに関する著作などが所蔵されていた。ここには、雑誌のシャー・ワリーウッラー特集号やマウドゥーディー死亡時の新聞記事などがおさめられている。一般の図書館では新聞や雑誌はそれぞれ別に所蔵されるが、アキール文庫の場合、テーマに応じた所蔵を行っており、新聞や雑誌であっても、その主たるテーマや収載論文等が特定の人物や出来事に関連している場合、その棚に所蔵されていた。人物伝ではウルドゥー語版のアタチュルク伝、旅行記では同じくウルドゥー語でのアメリカ人による南アジア旅行記集など、現在では入手困難な興味深い書籍が残っている。

応接室兼書庫B

続く20畳ほどの大きな部屋は応接室も兼ねる部分であるが、ここには特に工具類となる辞書、辞典や各種書籍目録や、タズキラ（列伝、人物伝）、写本などが所蔵されていた。目録に関しては、写本のカタログを筆頭に、人物伝、雑誌カタログ、博物館のカタログなどが、特にペルシア語とアラビア語の書籍に関するもので占められている。辞書、辞典類はウルドゥー語の辞典がほとんどである。タズキラについては、インドとパキスタンの多くの地域に関

するウルドゥー語文献を収集しておられる点も特徴的である。タズキラは、地方史同様に、収集家の出身地や居住地に関わるスーフィーらの文献を集めている傾向があり、他の地域のスーフィーに関する書籍にまでなかなか手が回らないのが実情である。ましてや、パキスタン人研究者にとって、インド東部や南部などのスーフィーに関するウルドゥー語の文献を集めることはかなりの困難があることは想像に難くない。それはインド人研究者がパキスタンの文献を集める点での困難と同じであるが、そのような障壁を乗り越えて集めてこられたタズキラ群は、南アジアのスーフィズムを理解するうえでこの上ない情報を提供してくれるものであろう。

写本の中には、18 世紀末にデリーで詩人ミール・ハサン（Mīr Ḥasan, 1736/7–86）によって書かれたウルドゥー文学史上名高いマスナヴィー（物語詩 mathnavī）、『叙法の魔術 *Siḥr al-Bayān*』の 1842 年の写本を含んでいる。個人的な話であるが、ムシュフィク・ハージャ著の浩瀚な著作『ウルドゥー写本研究 *Jā'iza Makhṯūtāt Urdū*』（1979）[7]読後の 1989 年、ラーホール留学中にアキール博士のカラーチーのご自宅を初めて訪問した際、最初に見せていただきたいとアキール博士に申し上げたのはこの研究書に記載されていたこの物語詩の写本であった。アキール博士もこの希望をかなえてくださり、執務机のカギのかかった抽斗から写本を見せてくださったのを思い出す。写本の数は決して多くはないが、その重要さにおいては疑うところのないものである。

同じ部屋には、ウルドゥー文学史、詩人伝、文人伝、人名録、メディア関連図書、西洋文学なども所蔵されていた。人名録には、ムスリム政治家や政治指導者となったウラマーらの伝記も豊富に含まれている。

書庫 C

奥右手の部屋はウルドゥー文学が所蔵されている。ウルドゥー文学作品は作家の名前のウルドゥー語アルファベット順に並べられているが、アキール文庫では、ナアト（アッラーへの賛辞）、ハムド（預言者への賛辞）、詩作、小説、戯曲、文芸潮流、進歩主義作家運動、批評、文学論など、ウルドゥー文学研究においてパキスタンの高等教育機関等でシラバスとして一般的に分類されるジャンルによって分けられている。さらに、ヒンドゥーやスィク教徒など非ムスリム作家の作品群は別途棚を設けていることや、南インド、デカン地方で開花したダカニー文学、ベンガル文学、パンジャービー文学、ヒンディー文学、インド文学全般、アラブ文学、ペルシア文学は別に分類されている。さらに、南アジアでしばしば大きな政治問題化する言語問題に関しても別途棚が設けられている。ウルドゥー語文法、ウルドゥー語に関する言語学的考察などもこの部屋に所蔵されていた。

書庫 D

奥左手の部屋にはパキスタンの建国詩人とされるムハンマド・イクバール関連書籍が所蔵されている。ほかに、イスラーム学関連書籍や預言者伝、イスラーム思想、シーア派関連書籍、スーフィズム、クルアーンのタフスィール、キリスト教、スィク教に関する

7） Mushfiq Khwāja, 1979, *Jā'iza Makhṯūṯāt Urdū*, jild Avval, Karachi: Markazī Urdū Boṛd.

書籍など宗教関連の文献が主流となっている。また、1990年代から盛んに刊行されるようになった世界におけるムスリム女性論や南アジアのムスリム女性論、あるいは女流作家によるウルドゥー文学論などの書籍もこの部屋に置かれていた。さらに、文芸誌などがウルドゥー語のアルファベット順に所蔵されていた。

残る台所を兼ねる部屋には教育に関する書籍が置かれていた。ウルドゥー語教育、教育制度、パキスタンにおける言語教育問題、パキスタンの教育機関の歴史、南アジアにおける教育機関などが主流を占めていた。

台所兼書庫E

これらを概観すると、アキール文庫が所蔵する文献の主題の分野が多岐にわたっていることを実感させられる。博士論文の題目や主要業績からも明らかなように、アキール博士の関心分野はウルドゥー語資料を用いたパキスタン独立運動期前後のムスリム思想史の研究である。したがって、収集された書籍も、幼少時から収集し始めたというウルドゥー文学のみならず、南アジアのイスラーム関連書籍、特にスーフィーに関するタズキラ、さらに地方史なども含んでいる点が特徴的である。また、ご自身の生誕地であるハイダラーバードはニザームと呼ばれる太守のもとイスラーム文化が花開いた南インドの拠点であり、インド屈指の高等教育機関であるウスマーニーヤ大学で奥様のご親族が教鞭を執っておられたことなどから、デカン地方のウルドゥー語文献も充実している点が特筆すべきところである。デカン地方の文学は、ムガル朝に先行する時代のデカン諸王朝時代にその起源をさかのぼり、ペルシア語による著作の他、ダカニーと呼ばれるこの地域のウルドゥー語によって多くの文学作品が残された。管見するところでは、パキスタンのみならず、南アジアでこれほど充実したダカニー文学の個人コレクションはあまりないであろう。アキール文庫におけるデカンに関する文献は地方史の部分と文学の部分に分けられているが、これらを総合すれば、デカンに関するムスリムの言説の多くが網羅できるであろう。

インドやパキスタンにおいてウルドゥー語文献を主体とする大規模個人コレクションは、1890年からパンジャーブ南部の地主一族が集め始め、総数30万冊の蔵書を誇るマスウード･ジャンデール研究図書館（Mas‘ūd Jhander Research Library）など数多く存在する[8)]。この中で、ワヒード・クレイシー（Waḥīd Qureshī, 1925–2009）元パンジャーブ大学オリエンタル・カレッジ・ウルドゥー文学研究科教授のコレクション[9)]、前述ムシュフィク・ハージャ氏のコレクション[10)]は、ウルドゥー文学を中心とした膨大なコレクションとして知られるが、これらの文庫は、イスラーム復興運動やスーフィーのタズキラなどを含んでいない。アキール文庫の特徴は、アキール博士が御自身の研究関心分野に基づいて収集した多彩な文献によって構成されている点であり、この文庫によって、南アジアのイスラーム文化やムスリム社会を多角的、立体的に照射することが可能となる点にある。

8）南アジア全体をとおして、ヒンディー語に比べるとウルドゥー語の文献の収集家が多いという話を耳にすることがままある。ヒンディー語文献の刊行がウルドゥー語のそれに比べてやや後発的である点など様々な理由が考えられるが、識字率がまだ高くない社会で、ウルドゥー語文献の収集家が多いことは驚くべき点である。（山根聡 2008「海外文献調査ガイド9　パキスタン」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会, pp.533–535.

9）現在、ラーホールのガヴァメント・カレッジ大学図書館に所蔵されている。

10）刊本15500点、雑誌460点が所蔵されている。現在、アメリカの複数の研究機関からなるUrdu Research Library Consortiumにより整理が進められている。

すでに京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科ではウルドゥー語の文献の収集を行ってきていたが、アキール文庫が加わることで、わが国における南アジア・イスラーム研究のさらなる進展が期待されることとなろう。